

『撰大乘論』の世親釈の「十名」における 諸訳の錯簡とその統一的修正の論

真 田 英 範

(一) 錯簡の指摘

十名の錯簡は世親釈の中で、真諦訳、笈多共行矩等訳、玄奘訳に共通して見られ、チベット訳には見られない。無性釈では、玄奘訳とチベット訳共に見られない。この事はインドにその錯簡があったことを示す。理由は、当学会の私の前回の論文に記す。錯簡の三訳は玄奘訳で代表する。資料のべし数は大正藏經の三一巻による。チベット訳はデルゲ版。

(ウ) (三五二頁中段) 論日 於此悟入唯識性中何所悟入如何悟入。入唯識性、相見二性及種種性、若名若義自性差別假自性差別義如是六種義皆無故。所取能取性現前故。一時現似種種相義而生起故。如闇中繩、……、一日、……、一時現似種種相義而生起故者謂似種種名句文相而生起故及似種種依止此義而生起故。(甲) 此中繩喻顯示悟入三種自性。

(イ) (三五二頁下段) 論日 如是菩薩悟入意言似義相故悟入遍

印度學佛教學研究第三十七卷第一號 昭和六十三年十二月

計所執性。悟入唯識故悟入依他起性。云何悟入円成実性若已滅除意言聞法熏習種類唯識之想、爾時菩薩已遣義想一切似義無容得生故。似唯識亦不得生。由是因縁住一切義無分別名。

(ウ) (三五二頁上段) 論日 此中有頌

法補特伽羅 法義略広性(姓)
不淨淨究竟 名所行差別

積日 如前所説住一切義無分別名(以下、十名の名と解説。)(第二) 補特伽羅名者謂仏及隨信行等、(第五) 略名者謂有情等。(第十名として) 究竟名者謂一切法總相所縁。是諸菩薩所縁名類略有十種。一法名謂眼等 二補特伽羅名謂我等 三法名謂十二分教 四義名謂此十二分教所詮諸義 五略名謂一切法為無為等 六広名謂色受等及虚空等 七姓名謂阿字為初訶字為後 八不淨名謂諸異生 九淨名謂諸見諦 十究竟名謂一切法總相所縁 即是二智所縁境界謂出世智及後得智以一切法真如実際為所縁故 以一切法種種相別為所縁故。如十地等此中意

『撰大乘論』の世親釈の「十名」における諸訳の錯簡とその統一修正の論（真田）

取於一切義總相緣智。所緣境界。如是品類是諸菩薩名。所行別。

今、資料(ウ)にある二つの十名の文のうち、後者(「」内、すなわち傍線部)は錯簡の文であり、資料(フ)の(甲)にあったものである。

(二) 錯簡の理由

(1) 前者の十名は円成実性であり、「如前所説住一切義無分別名」がそれを示す。後者の十名は依他起性である。「是諸菩薩所緣名」がそれを示す。真諦訳の資料(フ)の傍線部を参照(二〇四頁中右)。二つの十名は別物であり、ここの釈は前者と後の論により前者が正しい。

(2) 前者の十名は無分別智平等の立場に立ち差別を述べている。究竟した菩薩が真如に至った過程から差別を述べている。第五の有情等はアラヤ識縁起と思う。後者の十名は、一人の(或は一人一人各別の)菩薩の迷いの立場に立ち所縁を述べている。所縁とはその菩薩にとっては、所執であり、実在である。菩薩は、その実在に依止して自己を形成する。その意味で、菩薩の依他起性の虚妄の世界である。その中に、染と浄の二分がある。浄とは仏教の真実である。菩薩は、虚妄を脱するため、依他起の浄の修行をして、自立、無依止の般若を成就する。これが円成実性である。従って、この十名

は前者の前に必ずあるはずである。前者は究竟した菩薩の平等理を観ずる。

(3) 資料(フ)では、所縁の唯識性(能相)を示す。傍線部はその依他起性、生起性、所縁性たる名句文相を示し、十名はその整理である。

(4) 資料(フ)の繩喻は比喻により菩薩が円成実に至ることを示す。後者の十名はもと、(甲)にあって、そのための根拠を示している。

(5) 資料(イ)の傍線部は、菩薩が依他起としての虚妄性より、自立、無依止の真実性(般若)に至ることを示す重要な文である。執著(染浄の種子)による自己形成を脱し、真実に至ることを示す(イ)の前に、依他起としての染浄の十名を示す文が必ずあったのであり、それが(甲)にあった十名の文である。

(6) 無性積からの証明。四一六頁上段、資料(ウ)の論の釈は前者の十名のみ載す。又、資料(イ)の「住一切義無分別名」の積(同頁同段)に、「一切法是契経等。名所依行処名一切義。名有三十種。前九種名有。其所分別。其第十名於一切義。無所分別。」とある。これは(フ)に後者の十名があることを示す。後の論からの部分的初提示ならその言及があるはず。ここのチベット訳(二四五b六右から)も趣旨は全く同じ。

(7) チベット訳世親釈からの証明。ここは錯簡の多い所で、証明の前にまず、錯簡を修正した玄奘訳を先に一括して示

し、次にそれに対応するチベット訳を示し修正する。①「三四九頁中十三（中段の右から十三行目、以下同じ）能悟→同頁下六 根故」②「→同頁下十五 持力」③「→三五〇頁上四 有故」④「→同頁中十四 円満」⑤「→同頁下二九 預」⑥「→三五一頁上十三 転時」⑦「同十四 断分別→同頁下五 悟入」⑧「→同頁下七 生起故」⑨「錯簡文」⑩「三五二頁下七 此中→三五二頁中八、九 心性」⑪「→同頁同十三 別故」⑫「→同頁下十七 止義」⑬「→同頁同二六 転時」⑭「→」以上に相当するチベット訳は。①「一五九b二行中→同七右その後、半行は加筆」②「一五七b三左→同六右」③「一六〇a一左→同五右」④「一五七b六右→一五八a七右」⑤「一六〇a五右（第一欠）→一六一a二左」⑥「一五八a七右→同b五左。この後、同六左までは加筆。⑦「一六一a二右この左側は加筆。→同b二右」⑧「一五八b六左→同右」⑨「一五八b七左→一五九a三中」⑩「一六一b二右→一六二a六中」⑪「一五九a三中→同五中」⑫「一六二a六中→同b五左」⑬「一五九a五中→同b二中」⑭「一六二b五左→」

以上、チベット訳世親釈からの証明

(a) 全部の錯簡を修正した文は、玄奘訳の当該の錯簡を修正した文と一致する。特にチベット訳で、⑧、⑨、の連続

『撰大乘論』の世親釈の「十名」における諸訳の錯簡とその統一的修正の論』（真田）

と⑩に後者の十名が無い事は重要である。

(b) 玄奘訳の錯簡文（後者の十名の文）に相当するチベット訳に、後の論と全く同じ十名頌がある。これは玄奘訳の所にはあり得ぬ事で、今の位置の正しさを示す。

(c) 第十名の究竟名は、前者「総法たるものにおける所縁であり、十地の如し」とあり、錯簡相当文（後者の十名）では「不共法たるものにおける所縁の、出世智と後得智の二つの所縁である」とあって、逆になっている。その理由は。前者は、円成実の内容の平等性を述べ、後者は、人格成就した菩薩個人の、無依止性、自立性、不共性の智を述べているからである。ここに私は、「撰大乘論」の立場からの空性の真実義を見る。その真実義とは、依他性・虚妄・すなわち、依他性、空性だからこそ虚妄なのであり断すべきであると思って、自立、無依止の人格を成就する菩薩の般若（智）をいう。なお、「撰大乘論」全体を見た三性説は省略するが、核心は正しく述べて来たと思う。

〈キーワード〉 撰論釈、錯簡、修正

（県立小田原城内高等学校教諭）